

令和3年度

北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業に係る

点検・評価報告書

北海道農政部農村振興局農村設計課

I 点検・評価について

1 点検・評価の対象地区

北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業の地域活動支援事業の実施地区のうち、令和3年度に事業を完了した根室市厚床地区、上ノ国町上ノ国地区。

2 点検・評価の方法

事業実施地区を訪問し、事業の進捗状況の確認や関係者へのアドバイスを行っている北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会委員からの意見や、毎年度の活動終了時に行う活動の評価・検証結果を基に道が評価した。

3 北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会委員

所 属	職 名	氏 名	備 考
NPO 法人北海道食の自給ネットワーク	事務局長	大熊 久美子	
フードライター		小西 由稀	
北海道大学大学院農学研究院	准教授	小林 国之	
北海道土地改良事業団体連合会	技術監	中山 篤史	
北海道大学大学院農学研究院	准教授	山本 忠男	座長

(氏名五十音順)

II 根室市厚床地区に係る評価について

1 厚床地区の活動内容について

(1) 地域及び活動団体の概要

本地区の根室市は、北海道の東部に位置し、昭和32年、根室町と和田村の合併で誕生した、面積506.25km²、人口24,858人、世帯数12,469戸（令和3年1月1日現在・住民基本台帳）の市である。

北はオホーツク海、南は太平洋を臨み、西には白鳥の湖として知られる風蓮湖と世界有数の野鳥・水鳥の飛来地として有名である春国岱のラムサール条約登録湿地を有する自然豊かなまちである。気候は海洋性気候で年間の海霧日数は例年100日前後に達する。

根室市の中心街から西に約30kmの距離に位置する厚床地区は、大規模な草地が造成されており、酪農業が中心産業となっている。釧路市方面へ通じる国道44号線、別海町方面へ通じる国道243号の国道2路線や、JR根室本線を有し、バス路線も充実していることから、根室管内の玄関口として交通拠点となっている。また、中標津空港から車で1時間圏内に位置し、首都圏からのアクセスもよい。

本地区は、農協青年部の有志5名で結成した「酪農家集団AB-MOB I T」が、交流人口の増加と酪農への理解を深めてもらうことを目的に、厚床地区にフットパスコースを整備（H16開通）。キャンプ場やファームレストランなど地域の施設と連動した交流活動を行ってきた。しかしながら地区としては、ラムサール条約登録湿地や農村景観、フットパスコースなど魅力的な地域資源のポテンシャルを生かし切れていない、生産年齢人口が少なく地域活動の担い手が不足、地域住民を巻き込んだ地域活動ができていないなどの課題があった。

こうした中、「酪農家集団AB-MOB I T」を中心に、厚床連合町会やJA等を交えた新たな地域づくりの組織としてH29年厚床地域農村再生プロジェクトを立ち上げ、地域活性化に向けた、都市住民との地域間交流促進による交流人口の増加や、地域の世代間交流、地域資源の魅力の確認・共有とその活用手法の整理、地域住民自らが地域づくり構想を作り上げるプロセス体感を専門家を交えて行っていくことで、今後の厚床地区の姿を目標づけることとした。

(2) 活動の推移

活動事項	年度	活動状況
<ul style="list-style-type: none"> ・厚床地域ビジョン作成に関する取り組み ・活動内容の地域への周知及び理解の促進 	30	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>防災キャンプ（11月）参加者数：62名</u> ・<u>交流会（パークゴルフ大会）（8月）参加者数：48名</u> ・<u>ワークショップ（7月）参加者数：19名</u> ・<u>ワークショップ（10月）参加者数：17名</u> ・<u>ワークショップ（1月）参加者数：9名</u> ・<u>ワークショップ（3月）参加者数：29名</u>
	1	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>厚床防災合宿（1月）参加者数：32名</u> ・<u>あっとこ農園（4月～10月）参加者数：10名</u> ・<u>フットパスコース整備（9月）参加者数：40名</u> ・<u>ワークショップ（8月）参加者数：14名</u> ・<u>ワークショップ（11月）参加者数：17名</u> ・<u>ワークショップ（3月）参加者数：10名</u>
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>ワークショップ（7月）参加者数：15名</u> ・<u>アンケート調査（9月）参加者数：53名</u> ・<u>アンケート調査（10月）参加者数：27名</u> ・<u>アンケート調査結果報告会（3月）昼の部参加者数：22名、夜の部参加者数：19名</u>
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>フットパスコース整備（プロモーション動画作成（6月～10月）</u> ・<u>ワークショップ（3月）参加者数：10名</u>

注) 下線は、北海道中山間ふるさと水と土保全対策事業より対応

【活動状況写真】

平成30年度

防災キャンプ



防災講座



新聞食器作り



衛星携帯電話実演



夕食準備



釜戸炊飯



夕食



防災紙芝居



段ボールベッド



段ボールベッド



自由時間



自由時間



集合写真



朝食準備



市街地散策



市街地散策（神社）



市街地散策（転車台跡）



市街地散策（フットパス）

交流会



ワークショップ



令和元年度

厚床防災合宿



アイスブレイク（自己紹介）



なまずの学校



夕食準備



夕食準備



夕食



お風呂（別海町郊楽苑へ）



防災絵本読み聞かせ



段ボールベッド作成



ラジオ体操



朝食準備



朝食



心肺蘇生の講習



心肺蘇生の講習



防災運動会



閉会式

あっとこ農園



畑整備状況



ビニルハウス設置



作物生育状況

フットパスコース整備



実施前打合せ



現地確認



現地確認

ワークショップ



令和2年度

ワークショップ



アンケート調査



アンケート調査結果報告会



令和3年度

フットパスコース整備（プロモーション動画作成）



ワークショップ



(3) 活動への委員会の助言と反映状況

① 委員会からの主な助言内容

- ・ ワークショップに子供も参加してもらい、意見を聞いてはどうか。
- ・ あつとこ農園は小学校と連携してはどうか。

② 委員会の助言の反映及び効果

- ・ ワークショップには親が来ているから子供も来ているという形で子供も参加しているが、それ以外にも子供たちの話を聞く機会を持つため、防災キャンプという形で子供たちや地域住民に集ってもらい、意見交換する機会を設けた。
- ・ あつとこ農園は、旧厚床小学校の敷地を借りて実施。厚床小中学校の校長先生やPTAの協力があり、繋がりが出来てきている。

(4) 目標の達成状況

活動計画に明記した目標（数値・定性）の達成状況を以下に示す。

目標（数値・定性）	目標の達成状況
1 厚床地域ビジョン作成に関する取組み ・ 地域間及び世代間交流人口の増加 ・ 地域資源（魅力）の確認	<ul style="list-style-type: none">・ 防災知識の習得と地域内の多世代間の交流促進を目的に防災キャンプ（R1は防災合宿に改称）を開催し、地域の子供からお年寄りまでが参加した（H30、R1）・ 農協主催のパークゴルフ大会に地域住民も参加し、農業者と地域住民との地域間交流を図った。（H30）
2 活動内容の地域への周知及び理解の促進	<ul style="list-style-type: none">・ 専修大学の学生とフットパスコースを整備した。（R1）・ 住民同士のふれあいの場として地元住民が共同で野菜を栽培、収穫するあつとこ農園を作った。（R1）・ 「地域資源・課題の確認と共有」、「地域課題の解決に向けて」、「活動計画の検討」、「地域づくりについて」などをテーマにワークショップを開催した。（H30、R1、R2、R3）・ 厚床地域の住民及び関係者を対象に、「厚床地域の未来を形づくるためのアンケート調査」を実施。買い物・医療・福祉・娯楽・生活などで困っていることなどの聞き取りを行った。（R2）・ 調査結果報告会を、地域住民が幅広く参加できるよう、昼の部と夜の部の2回に分けて開催した。（R2）・ 「厚床地域の未来を形づくるためのアンケート」調査結果をテーマごとにまとめ、「厚床通信」として地域住民に配布した。（R3）

	<ul style="list-style-type: none"> 厚床地域や地域資源としてのフットパスコースの魅力発信のため、プロモーション動画を作成した。 (R3)
--	--

2 厚床地区の活動の評価について

当該地区の活動を、(1) 活動の状況、(2) 活動への支援体制、(3) ふる水事業の目的(趣旨)達成の可能性という3つの視点に基づき評価する。

(1) 活動の状況

本地区の主な活動内容は、地域間及び世代間の交流を図り、地域資源の確認を行う中で、地域ビジョン作成に向けて意識を高め、地域ビジョンを作成していくことであり、以下に主な活動の状況について記載。

①防災キャンプ(合宿)

防災キャンプ(合宿)は、1泊2日の行程でH30年とR1年の2回実施。

地域の子供からお年寄りまで参加し、防災をテーマとした体験活動や、食事、宿泊、厚床の歴史を勉強する町歩きを共に行うことで、楽しみながら世代間交流を図り、地域資源の確認を行うことができた。

②フットパスコース

フットパスコースについては専修大学(神奈川県)の学生がA B-M O B I Tと共に整備。新コースのルートの確認作業を実施した。北海道胆振東部地震や新型コロナウイルス感染拡大の影響で、専修大学の学生が携わる作業は令和元年度しか実施できなかったが、専修大学との関わりは事業開始前から続いており、障害がなくなれば今後も交流は続いていくものと考えている。

③あっとこ農園

あっとこ農園は令和元年度に旧厚床小学校の菜園で使用されていたビニールハウス1棟と、露地の畑を再生して実施。収穫した野菜は、防災合宿の夕食にも利用した。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、春先の準備ができなかったこと、また、農園の管理が特定の者に偏ってしまい、負担となっていたこともあり、結果的に令和元年度のみの実施となった。実施時においては、教育関係者の協力もあり繋がりができていたことを考えると、管理体制の構築が難しい課題であるが、地域住民同士の日常的な関わりを作る場として再開が望まれる。

④ワークショップ

ワークショップについては、地域住民の参加を得て毎年実施し、地域の課題を掘り起こし、地域ビジョンを作成していくプロセスを体験することができた。特に「厚床地域の未来を形づくるためのアンケート調査」では、厚床での暮らしぶりのほか、厚床会館の改修に関する意見についても聴き取りを行い、会館に求める機能として挙げられた「子供たちが遊べる場所」「つながりづくりの場所」などの声は、現在の地域の暮らしで求めていることの現れともいえ、地域住民の意見を聴き取る貴重な場とな

った。また、アンケート調査結果の住民報告会では、市街地と農村部に分けて整理されたアンケート結果を見ながら意見交換が行われ、参加住民それぞれの問題意識の違いについても明らかとなるなど、アンケート調査報告会を含むワークショップは、活動内容の地域への周知や理解を促す役割も果たしたといえ、高い効果を上げたと考える。

(2) 活動への支援体制

北海道大学大学院農学研究院小林准教授は地域ビジョン作成に関する取組みを全面的に支援。また、ゼミ生も加え、住民アンケート調査及びとりまとめ、防災キャンプ（合宿）での子供たちへの指導などを支援した。専修大学泉教授はフィールドワークの一環としてフットパスコース整備を支援。ゼミ生が活動団体と共に実施した。防災合宿は北海道教育大学釧路校宮前准教授が浦幌町で実施している「浦幌通楽（学）合宿」をヒントに防災キャンプと融合させた形でゼミ生が実施。根室市は、防災キャンプでは防災についての講演や備蓄用非常食の提供、ワークショップでは市政に関する情報提供の側面から支援した。

(3) ふる水事業の目的（趣旨）の達成の可能性

地域に住んでいる大人と子供との間、もしくは市街地の住人と農村部の住人との間で、自分たちの地域について考える機会、話し合う機会がなかったなかで、どうすれば人が集まり話し合うきっかけが生まれるのかを考え、子供からお年寄りまでが参加する交流事業を実施したことは、地域間・世代間交流を図るという目標を達成し、今後の地域活性化に繋がる取組みであったと評価できる。

一方、そうした地域住民交流の場であった、あつとこ農園や防災合宿が事業後半中止となり、継続できなかったことは、新型コロナウイルス感染拡大の影響で人と人との直接的な交流が妨げられたことから、ある程度やむを得ない結果ともいえる。

しかしながら、ワークショップやアンケート調査で、住民それぞれの地域に対する思いや希望が明らかになり、地域の課題や展望を本地区が得られたことは大きな成果となった。

これらの成果から本地区は、地域づくりに向けたスタートラインに本格的に立ったともいえ、今後活動団体は、地域活性化の核として地域住民とともに本事業を通じて交流が生まれた学生や若手農業者、教育関係者などと手を携え、新たな地域づくりの担い手となり、地域づくりに携わっていくことが望まれる。また、防災合宿に参加した子供たちが成長して、自分たちが経験したことをさらに下の世代に繋いでいくことを期待するものである。

Ⅲ 上ノ国町上ノ国地区に係る評価について

1 上ノ国地区の活動内容について

(1) 地域及び活動団体の概要

本地区の上ノ国町は、渡島半島の南西、檜山振興局管内の最南端に位置する、明治12年、上ノ国村三カ所に戸長役場が設置され誕生した、面積547.71㎢、人口4,615人、世帯数2,453戸（令和3年1月1日現在・住民基本台帳）の町である。15世紀ころ、北海道南部の日本海側は上ノ国（かみのくに）、太平洋側は下の国（しものくに）と称され、勝山館を擁し、日本海・北方貿易の拠点として栄えたこの地に上ノ国（かみのくに）の名前が残ったことに町名は由来する。

北は江差町、厚沢部町、南は松前町、福島町、東は渡島山地の分水嶺をもって木古内町、知内町と接し、西は日本海に延長30kmに渡って面している。町土の92%が地下資源と森林資源を包蔵する山地で占められ、平野部は、北部を流れる天野川、中部を流れる大安在川、南部の石崎川流域に形成され、農用地として利用されている。地域の気候は、比較的温暖で日照時間は短く、5月から6月までこの地方特有のヤマセ（南東の風）が吹き、冬期間は北西の季節風が吹き荒れる。

産業構造は、昭和35年の最盛期には農林漁業を基幹産業とし、マンガン鉱山などの開発による鉱業就労者などによって支えられてきたが、鉱山の閉山に伴い関連企業も衰退し、基幹産業である農林漁業においては従事者の高齢化、後継者不足が急激に進み、特に漁業では漁獲量の減少など依然として厳しい状況に置かれている。そのため農業分野では振興作物（小豆・アスパラガス・いちご・さやいんげん・さやえんどう・にら・馬鈴薯・ブロッコリー）のブランド化を進め、漁業では種苗生産や放流に転換を図りつつ、漁場整備や藻場環境の保全に取り組んでいる。

このうち絹さやえんどうは全道屈指の規模・生産量を誇っており、品質もよく市場関係者から高い評価を得ているが、町内での流通はほとんどなく、また、産地ならではの料理や加工品もなく、地元で「食」として根付いていない状況であった。

こうした中、絹さやえんどうを軸とした生産者と地域を結ぶ取組みを通じて産地の維持と地産地消の促進、「食」を軸とした地域振興を実現するため、平成28年に生産組合、JA等で絹さやえんどうの利用実態調査を開始。絹さやえんどうを使用した多様な家庭料理があることを確認し、料理集の作成や、食育と需要喚起を兼ねたイベントを実施したが、町民への周知や地産地消が進まない状況であった。

このため、檜山南部サヤエンドウ生産組合企画班では、町民向けのイベントや食育活動を通じ、上ノ国町が絹さやえんどうの産地であることの周知と需要の喚起、絹さやえんどう料理を地域の定番料理として定着させること、生産者に対しては、地域の食文化や経済にとって必要不可欠な作物であることを理解してもらい、生産意欲の向上を図ることを目指している。

(2) 活動の推移

活動事項	年度	活動状況
町民の「絹さやえんどう」に対する関心を高める	30	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>絹さやえんどう料理教室の開催（2月）参加者数：37名</u> ・<u>上ノ国産絹さやえんどうのPR（10月）参加者数：59名</u>
	1	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>絹さやえんどうのPR（7月）参加者数：20名</u> ・<u>絹さやえんどうのPR（10月）参加者数：80名</u>
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>地元学校との絹さやえんどう利活用連携活動（河北小学校食育授業）（11月）参加者数：15名</u>
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>地元学校との絹さやえんどう利活用連携活動（河北小学校収穫体験）（9月）参加者数：15名</u> ・<u>地元学校との絹さやえんどう利活用連携活動（河北小学校食育授業）（12月）参加者数：15名</u> ・<u>地元学校との絹さやえんどう利活用連携活動（滝沢小学校食育授業）（12月）参加者数：20名</u> ・<u>絹さやえんどうのレシピ集の改訂（3月）</u>
「絹さやえんどう料理、加工品」の開発、定着	30	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>絹さやえんどう料理の開発（10月1回目）参加者数：11名</u> ・<u>絹さやえんどう料理の開発（10月2回目）参加者数：4名</u> ・<u>絹さやえんどうスイーツの開発（2月）参加者数：37名</u> ・<u>絹さやえんどう料理検討会の開催（3月）参加者数：39名</u>
	1	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>絹さやえんどう料理の開発（9月）参加者数：9名</u> ・<u>地元高校生による絹さやえんどう料理の開発（10月）参加者数：22名</u> ・<u>地元学校との料理検討会（お年寄りのための試食会）（12月）参加者数：26名</u> ・<u>絹さや大福の発売開始（8月）</u>

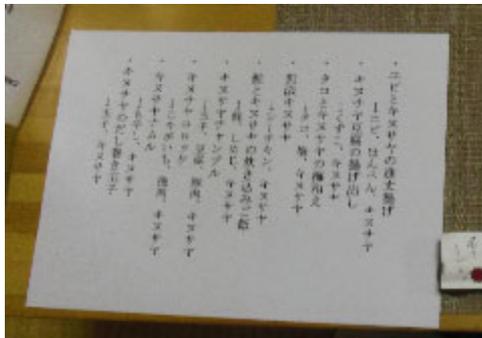
	2	・ <u>加工品の開発（粉末づくり）（7月）参加者数：7名</u>
	3	・ <u>加工品の開発（粉末を利用した商品化の検討）（4月）</u>
活動体制の強化	30	・ <u>農業者、関係機関及び商工観光業者との連携強化（10月）</u>
	1	・ <u>農業者、関係機関及び商工観光業者との連携強化（11月）</u>
	2	・ <u>農業者、関係機関及び商工観光業者との連携強化（7月）</u>
	3	・ <u>農業者、関係機関及び商工観光業者との連携強化（3月）</u>
「絹さやえんどう」の町内流通	2	・ <u>道の駅での絹さやえんどうの販売（9月）</u>
	3	・ <u>農業者、需要者等と町内流通について検討（12月）</u>

注) 下線は、北海道中山間ふるさと水と土保全対策事業より対応

【活動状況写真】

平成 30 年度

絹さやえんどう料理の開発 (10月1回目)



絹さやえんどう料理の開発 (10月2回目)



絹さやえんどう料理教室 (2月)

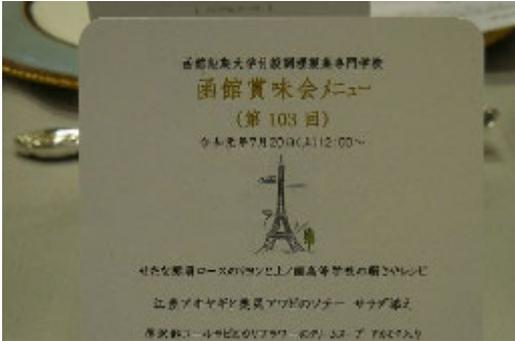


絹さやえんどう料理検討会 (3月)

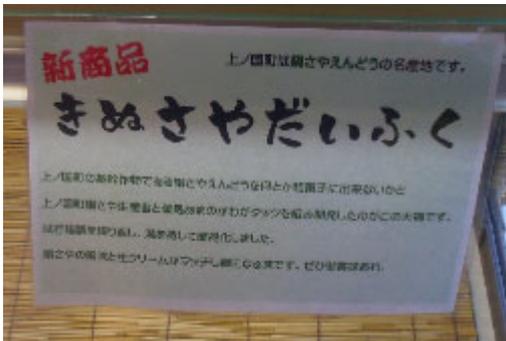


令和元年度

絹さやえんどうのPR（7、10月）



絹さや大福の発売開始（8月）



地元高校生による絹さやえんどう料理の開発（10月）



地元学校との料理検討会（お年寄りのための試食会）（12月）



令和2年度

加工品の開発（粉末づくり）、農業者、関係機関及び商工観光業者との連携強化（7月）



地元学校との絹さやえんどう利活用連携活動（河北小学校食育授業）（11月）



令和3年度

加工品の開発（粉末を利用した商品化の検討）（4月）



地元学校との絹さやえんどう利活用連携活動（河北小学校収穫体験）（9月）



地元学校との絹さやえんどう利活用連携活動（河北小学校食育授業）（12月）



地元学校との絹さやえんどう利活用連携活動（滝沢小学校食育授業）（12月）



(3) 活動への委員会の助言と反映状況

① 委員会からの主な助言内容

- ・ 絹さやえんどうの収穫体験など、小学生向けの食育をしたほうがよいのでは。
- ・ 地元の学校関係者や料理人など事業を通じて培った地域の人たちとの繋がりを事業終了後も維持していく必要があるのではないか。
- ・ レシピ集は冊子で作成だけではなく、役場やJAのホームページに掲載してもらってはどうか。
- ・ 子供たちへのアンケートや作文をやってみてはどうか。

② 委員会の助言の反映及び効果

- ・ 河北小学校の3・4年の児童に収穫体験をしてもらった。また、5・6年の児童を対象に、レシピ集に掲載している絹さやえんどうの味噌汁、卵とじ、ぎょうざ、肉巻きの調理指導を行った。滝沢小学校では児童とその親を対象に、親子クッキング教室を開催した。
- ・ 事業終了後の継続的な活動に向けては、今後も、生産組合、小学校及び関係機関が会合を持ち、食育授業を実施する予定だが、活動の幅を広げるためにも地元料理人や商工会の参加も呼びかけていく。
- ・ レシピ集は上ノ国町、檜山農業改良普及センターのホームページに掲載。また、一部レシピについては「クックパッド公式キッチン「北海道」」に掲載している。
- ・ 河北小学校の食育授業の後にアンケートを実施し、おいしい料理が作れたのでうれしかった、来年もサヤエンドウ料理を作ってみたいなどの感想があった。河北小学校の収穫体験では、生徒たちより、さやえんどうに関する質問の声が多くあげられた（どこで買えるのか、さやえんどう栽培の苦労は？等々）。本活動を通し、地元特産品であるさやえんどうに対する関心を高めることができた。

(4) 目標の達成状況

活動計画に明記した目標（数値・定性）の達成状況を以下に示す。

目標（数値・定性）	目標の達成状況
1 町民の「絹さやえんどう」に対する関心を高める 食育イベントの開催、 「絹さやえんどう」に関 係した情報の発信	<ul style="list-style-type: none">・ 町民を対象とした親子料理教室で絹さやえんどう餡を使用した和菓子づくりを行った。(H30)・ 上ノ国町が全道屈指の絹さやえんどうの産地であることを知っているかのアンケートを実施した。(H30)・ 絹さやえんどうの試食と販売、レシピ集の配布を行った。(H30、R1)・ 函館市の調理製菓専門学校のイベントで、レシピ集に掲載している料理を披露してもらった。(R1)

	<ul style="list-style-type: none"> 河北小学校の児童を対象に収穫体験を行った。(R3) 河北小学校の児童を対象に食育授業を行った。(R2、R3) 滝沢小学校の児童及びその親を対象に親子クッキング教室を開催した。(R3) レシピ集を改訂した。(R3)
<p>2 「絹さやえんどう料理、加工品」の開発、定着</p> <p>「絹さやえんどう」料理の開発、定番メニュー化、地元料理人との料理、加工品に関する検討</p>	<ul style="list-style-type: none"> 地元料理店の協力を得て、コロケ、進丈揚げなどの絹さやえんどう料理、和菓子、洋菓子を開発した。(H30) 生産者、町民、町長等が参加し、料理検討会を開催した。(H30) 広報誌やホームページで紹介することを目的に、地元料理店と連携し、レシピを作成した。(R1) 上ノ国高校の生徒と連携し、料理開発を行った。(R1) 上ノ国高校の生徒が開発した料理の試食会を開催した。(R1) 道の駅「もんじゅ」にて、絹さや大福の発売を開始した。(R1) 絹さやえんどうの粉末化及び粉末を利用した加工品に関する検討を行った。(R2、R3)
3 活動体制の強化	<ul style="list-style-type: none"> 農業者、関係機関及び商工観光業者と活動内容の検討・報告会を行った。(H30、R1、R2、R3)
4 「絹さやえんどうの」町内流通	<ul style="list-style-type: none"> 道の駅「もんじゅ」にて、絹さやえんどうの試行販売を行った。(R2) 農業者、需要者等と町内流通についての検討を行った。(R3)

2 上ノ国地区の活動の評価について

当該地区の活動を、(1) 活動の状況、(2) 活動への支援体制、(3) ふる水事業の目的(趣旨)達成の可能性という3つの視点に基づき評価する。

(1) 活動の状況

本地区の主な活動内容は、上ノ国町が絹さやえんどうの全道屈指の生産地であることの町民への理解の促進と需要の喚起、絹さやえんどう料理の地元への定着を通じ、地域活性化を図ることであった。

町民の「絹さやえんどう」に対する関心を高める取組みについては、町民を対象とした親子料理教室や上ノ国町産業まつりでの試食販売、レシピ集の配布を通じ、絹さやえんどうが地域の特産品であり、主菜、副菜、お菓子づくりにも幅広く使える食材であることの地域住民への理解を促す活動であったといえる。また、地元小学校を対象にした収穫体験や食育授業を実施するなど活動内容に発展がみられ、TVニュースに放映されたことで住民の関心も高まった。

「絹さやえんどう料理、加工品」の開発、定着に関する取組みについては、上ノ国高校フードデザイン授業で絹さやえんどう料理を開発。高校生の豊かな想像力で斬新な料理が生み出された。老人会の会長を招いた試食会も行われ、料理を通じた交流の場ともなった。また、地元の菓子店が開発した「絹さや大福」は道の駅で販売され、好調な売れ行きであった。絹さやえんどうの粉末化では、フリーズドライと温風乾燥の二つの方法で実施。加工品には発色がよいフリーズドライ製法の粉末の利用が望まれるが、多額の製作費がかかり、一定量の確保が求められることから、粉末を利用した加工品の開発は難航している。

活動体制の強化については、農業者、関係機関及び商工観光業者と活動内容の検討や報告会を行い、イベント参加者の反応などを共有し、活動に対するモチベーションにつなげた。

「絹さやえんどう」の町内流通については、道の駅で試行販売を実施。店頭に出せば売れるものの、町内に出す分ははね品が中心となるため、生産者としては商品としてお金を取りづらいとの意見が多く、流通体制の確立は難しいため、町内の飲食店等での料理の提供という形で流通を目指すこととしているが、当初の活動目的である地域の定番料理として定着させていくためには、町内での販売について検討していくことが望まれる。

(2) 活動への支援体制

上ノ国町は、産業祭り等イベントの企画支援、食育活動に関する学校との連絡調整等の役割を担い、農協は生産者に対する活動成果の周知、産地PR等により活動を支援してきた。

(3) ふる水事業の目的（趣旨）の達成の可能性

全道屈指の生産を誇る絹さやえんどうの町民への理解の促進や絹さやえんどう料理の定着を図るため、農業者、地元料理店、学校関係者、関係機関が連携して活動を行ってきたことは、一つの農産物を中心とした相互交流が生まれ、地域の連帯感を醸成し、地域活性化に寄与する取組みとして評価できる。また、地域の将来を担う高校生

や小学生に対する食育授業等は、絹さやえんどうを通じて地域への愛着を深めることが期待できる。

また、これまで開発した料理はレシピ集にまとめており、今後も上ノ国町、檜山農業改良普及センターのホームページを通じて情報発信を行い、絹さやえんどう料理が町内外に広がっていくことが期待できる。

本事業終了後も、生産組合、小学校及び関係機関が定期的な会合を持ち、食育授業を継続することとしている。今後も本事業で培った地域のつながりを深めつつ、「絹さやえんどう」を通じた地域の活性化を期待するものである。